

『吾輩は猫である』坊ば

Junko Higasa 2016.6.25

第十章には苦沙弥の娘たちが出てくるが、その中で世相を代弁しているのは三歳の坊や(坊ば)である。

(昔は幼い女の子も坊やと言った)『坊やはこれでも元禄を着ているのである』日清・日露戦争後に復古調が興り、活動的な袖の短い元禄が流行したが、元禄の表すものは経済の活性化である。その中で、坊ばは自分に与えられた小さな箸と茶碗に満足できず、姉の大きい茶碗と箸をひったくって使う。文中にあるように、無能無才の小人ほど、のさばり出て官職に就きたがる傾向があるが、その暴君の気質はこの年代の精神の幼さに由来するのである。自己の能力と状況の兼ね合いを識別できない者が、早急に多利を得ようと扱いづらい箸を握って急激に茶碗の底をつつけば、小さな能力で扱う大きな国家茶碗は平衡を失う。そのとき顔に飛びつくのは打算ある飯粒のみで、打算なき飯粒は畳の上に放り出される。転じて小人の加えた圧迫は自らの顔並びに国家の顔に跳ね返る汚点となり、潤沢は流出し国民は疲弊し、国家成長の元となる栄養を手に入れることは出来ない。

『吾輩は謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する』圧力で取り込める糧は極めて僅少である。それは元々戸惑った弱い飯粒であるから、すぐに消化されてしまう。打算ある者は著名なる顔には飛びつくが腹に収まることはない。強引な手法は本体の弱体化につながることを認識していただきたい。